

環境・農水常任委員会 県内行政調査

1 調査日 平成25年7月24日(水)

2 調査の概要

(1) 農事組合法人すごいええのう鮎河(甲賀市)

担い手不足や高齢化の進行、耕作放棄地の増加など農業の持続的な発展には、農業を継続できる担い手を確保し、集落の資源を十分に活かす仕組みである集落営農の取り組みが必要とされている。しかし、一方、集落営農を実施するなかで、リーダーがいない、集落内の意見が合わないなどの声も聞かれるところである。こうした中、農事組合法人すごいええのう鮎河は、将来を見据えた農業を目指して、若い役員を登用し、若い農業者や女性も含めた組織づくりを行っている。また、鮎河菜など鮎河ブランドの構築や鮎河米を使用した清酒など6次産業化、ブランド化の取り組みも計画的に進められていることから、組合の施設や運営状況などについて調査を行った。



また、県民参画委員会では、農事組合法人すごいええのう鮎河の組合員の方と集落営農のこれまで取り組みや成果、今後の集落営農のあり方等について、意見交換を行った。



組合員からは、農事組合法人は活動に制限があることから、農事組合法人が発展するためには、農協法の改正なども必要である、滋賀県には環境こだわり農産物の認証制度があるが、県外に出た場合に何ら効力がなく、制度の概要も認知されていない。制度の概要や全国との比較などがわかるような表示方法や認証マークの工夫が必要ではないか、などの意見が出された。

(2) 琵琶湖博物館（草津市）

琵琶湖博物館は、研究・調査に基礎をおきながら交流・サービス、情報の収集・発信、資料整備、展示を総合的に行うことによって、琵琶湖とその集水域および淀川流域の自然、歴史、暮らしについて理解を深め、地域の人々とともに「湖と人間」の新しい共存関係を築いていくことを使命とし、平成8年10月に開設された。

同博物館は、開館以来16年の間、研究・調査は進展し、多くの知見が蓄積されてきた。一方、人々の環境に対する意識やニーズは多様化し、新たな課題も顕在化してきたことから、昨年度、新琵琶湖博物館創造ビジョンを作成し、リニューアルに向けた検討を始めたところである。

このことから、同博物館のこれまでに培ってきた研究成果、知見等を含め、現状の課題とリニューアルに向けた課題等について調査を行った。



(3) 赤野井湾周辺（草津市、守山市）

赤野井湾は、琵琶湖東岸の守山市木浜町から草津市下物町（烏丸半島）までの約4.7キロメートルの湖岸線と小津袋と呼ばれる、面積が約9.5ヘクタールの内湖からなる地域であり、日本でも有数のハスの名所となっている。一方、ハスは水流を滞らせたり、枯れたハスが湖底に堆積することなどから、湾内の水質悪化が懸念されている。また、近年、外来植物のオオバナミズキンバイが急速に生息域を拡大しており、その対策が課題となっている。

このことから、ハス群落および外来植物の生息状況と除去等の対策について、赤野井湾周辺を調査した。

